15

『素問』『霊枢』中の「滑」「濇」について

上田善信

1　はじめに

中国医学の診断法の中で最も重要な脈診は、脈状診が中心となっている。脈状の研究には必ず『脈経』が引用され、判断の根拠とされる脈診の原典である。この脈状が表す種々の様相や脈状が表す病証については非常に判りにくい。確かに『脈経』巻一の冒頭に二十四脈状といわれている脈状の定義が置かれており、これが『脈経』の脈状全体を体系だてているかのようにみえる。しかし脈状に関しても先行する医書の断片的な条文からなるもので、二十四脈状の部分とそれ以外の部分とが、必ずしも一貫した体系で統一されているわけではない。例えば、巻二には十九脈証といわれるものがあり、この中の「牢脈」は二十四脈状にみられない脈状である。

確かに脈状の研究は『脈経』から始めるのがオーソドックであろうが、まずは『脈経』に引かれている『素問』『霊枢』『難経』『傷寒論』などの先行する医書の脈状を解析することが、『脈経』の脈状をより理解するための助けとなると思われる。そこで『素問』『霊枢』中にみえる脈状の中から「滑」「濇」について解析を行う。

2　『素問』の「滑」「濇」

『素問』中において「滑」は三十一回、「濇」は三十六回用いられている。その中で「滑」の二十八回、「濇」の二十九回のほとんどが脈状表現として用いられている。そして陰陽応象大論に「按尺寸観浮沈滑濇、而知病所生治」とあり、また通評虚実論に「寸脈急而尺緩也。…故滑則従、濇則逆也。…如此滑則生、濇則死也」とあるように、「滑」と「濇」とが相反する脈状として、それぞれの病症や予後を表している。その主要なものを挙げると、〈滑・風疝―病積・濇〉〈滑・従―逆・濇〉〈滑・生―死・濇〉というような対応関係である。

脈状表現以外では、尺膚、営衛の状態を表すものがある。『素問』においての「滑」と「濇」とは反対の概念を

対として用いている。

3　『霊枢』の「滑」「濇」

『霊枢』中において「滑」は五十一回、「濇」は四十四回用いられている。その中で脈状としては「滑」が二十六回、「濇」が二十三回とほぼ五割強である。脈状表現以外では、尺膚・肌肉の状態、気血の状態を表すものである。また『霊枢』においては、邪気蔵府病形に「脈滑者尺之皮膚亦滑、脈濇者尺之皮膚亦濇」とあるように、「滑」と「濇」が相反する脈状表現としてだけでなく、脈状と尺膚の状態とが関連するものとして扱われている。そして心脈・肺脈・肝脈・脾脈・腎脈と五蔵の脈それぞれの「滑」「濇」についての病症が述べられている。『霊枢』でも『素問』と同様に反対の概念を対として用いている。

4　まとめ

「滑」「濇」の表す状態として「滑」については、『説文』に「滑、利也」とあり、また『霊枢』中に「慓悍滑利」や「慓悍滑疾」とあるように、動きが速いかどうかを表すものである。また皮膚の状態を表すものとしては『広雅』に「滑、沢也」や「滑、美也」とあるように滑らかな状態を表している。「濇」については『淮南子』注に「濇、不滑也」とみえ、『霊枢』に「凝濇」という表現があるように、動きが滑らかでない状態を表す。『素問』『霊枢』の中の「滑」「濇」の用いられ方を見ると、両書では相違があるものの脈状表現が多く、『霊枢』の脈状表現以外の使用例を見ても「滑」「濇」は相反する状態で対概念を表している。しかし『脈経』の二十四脈状には、このような相反する脈状を対とする記述はみられない。このことからも、『脈経』に先行する医書の脈状研究が必要であることがわかる。

（日本鍼灸研究会）